

=====

GCOE NewsLetter

[No.34 2010/7/22]

平成22年度第1回gCOE論文賞の募集について

gCOE第9回国際研究集会の開催について

gCOE講演会の開催について

次のオープンレクチャーについて

「テキスト布置解釈学原論」の要約

「テキスト布置解釈学各論」の要約

「テキスト布置解釈学概論」の要約

gCOE研究会の要約

第29回オープンレクチャーの要約

グローバルCOE研究教育員ブリーフィング要約

gCOEスタッフ海外出張報告

=====

■ 平成22年度第1回gCOE論文賞の募集について

gCOE では論文を募り、優秀な論文を「グローバル COE 論文賞」として顕彰し、2011年3月刊行予定の『HERSETEC』に掲載します。多くの方々の積極的なご応募を期待します。受付期間は2010年8月30日（月）～9月6日（月）です。詳しい応募方法については下記のgCOEのWebページからご覧ください。

<http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/education/education04/>

■ gCOE第9回国際研究集会の開催について

第9回国際研究集会「ことばに向かう日本の学知—テキスト解釈の集積としての学史—」

日程：2010年9月9日（木）～11日（土）

場所：名古屋大学文系総合館7階カンファレンスホール

■ gCOE講演会の開催について

日時：2010年8月30日（月）15時より

場所：文学研究科大会議室

講演者：フィリップ・ヴァルテール（グルノーブル第3大学教授・イマジネール研究所所長）

題目：「中世史に残る噂をめぐる解釈学試論－シャルルマーニュと妹の近親相姦をめぐるって」

使用言語：フランス語（通訳あり）

■ 次回のオープンレクチャーについて

次回のオープンレクチャーは9月15日（水）の予定です。講演者・題目が決まり次第、gCOEのWebページでご紹介します。

■ 「テキスト布置解釈学原論」の要約

Toru Kuginuki, “Japanese traditional language study and modernization of Japanese linguistics” (1 and 8 July)

Key words: [TOKAKU as a concept of defining “sentence” Language as a process
ON’IN as an idea of pronunciation German metaphysics]

Japanese language study has a couple of main streams. One stream flows from traditional study since 12th century. And the other is western linguistics. The traditional study is composed of Teniwoha and Kanazukai. Teniwoha and Kanazukai had constituted the basic framework of the Japanese classical study. This study had been shouldered by the urban literary aristocracy and upper-class Samurai, urban military nobility. This study had continued from Kamakura period to the first half of Edo period, i.e. the 17th century. For the future from the second half of Edo period, the cutting-edge academic support shifted to provincial lower-class samurai from the traditional urban aristocracy and upper Samurai. Provincial samurai’s study of the second half of Edo period had been very demonstrated and rational and practical. Modern language studies in Japan directly depends on the study in this period. This pre-modern Japanese language study provided the modern scientific methods. Modern Japanese linguistics has been based on the thick accumulation of these academic streams.

After the Meiji period(1868 ~) the introduction of linguistics opened the new stage of Japanese language study. At first modern Japanese grammar was shouldered by scholars out of government since OTSKI Fumihiko 大槻文彦（1847~1928）.

YAMADA Yoshio 山田孝雄 (1873~1958) and MATSUSHITA Daizaburo 松下大三郎 (1878~1935) are both top grammarians out of main academic stream of government school. ARISAKA HIDEYO 有坂秀世 (1900~1952) and YAMADA had profoundly considered the theoretical definition on the object of study. ARISAKA had studied in classical phonetics, and YAMADA in grammar. ARISAKA thought what is sound as recognized mentally(音韻). YAMADA thought what is sentence. At the same time, TOKIEDA Motoki 時枝誠記 (1900~1967) thought what is a language. Commonly they referred the metaphysics in Germany. YAMADA's concept of apperception(TOKAKU 統覚) depends on the theory of Immanuel KANT(1724~1804). TOKIEDA and ARISAKA depend upon phenomenology of Edmund HUSSERL(1859~1938) for their definition "Language as a process" and "sound as an idea of pronunciation".

■ 「テキスト布置解釈学各論」の要約

各論II

フォヴェルグ・クレール(6/1, 8, 15, 22)

「『百科全書』における布置」

『百科全書』はいくつかの知の布置のモデルを受け継いでいるが、これらのモデルの中でも蔵書と蔵書目録のモデル、および文集のモデルは特別な位置を占めている。とはいえ、たとえ歴史学が我々の知識の原資料であったとしても、『百科全書』は単なる目録にとどまるものではない。確かに、『百科全書』自体が論証的であることを主張しているわけではないが、少なくとも説明的であろうとはしており、その意味で、教育的な目的を持っていると言える。知の循環として、『百科全書』は諸々の知識に新しい布置を提示するものである。もしこのような布置がなければ、『百科全書』のテキストはアルファベット順で示されているわけであり、十分な関連性を示すことができなかつたであろう。この関連性はテキストの次元において、概して項目から項目への参照に因っている。しかし、これらの参照は単に語彙の次元に留まることなく、物自体の次元にも、さらには『百科全書』の内容の次元にも位置付けられている。そのため、前もって示されていないにもかかわらず、一つの布置が『百科全書』を読むにつれて浮き彫りにされていくのである。以上のように、読むことによって読者は知識に対する観点を得て、この観点から見える物事の表面上の不明瞭さを理解するに至ることになる。従って、『百科全書』の布置はテキストの理解に達するという意味では、解釈学的な原理であるとも言えるのである。

各論 II

重見晋也 (6/29, 7/6, 13)

百科全書派の示した知の分類への意志には、知の横溢という現状認識が存在していたが、20世紀のハイパーテキストの創設者たちも同様の認識を共有していたことは、ヴァネヴァー・ブッシュの論文"As We May Think"(1945)で確認することができる。ブッシュはこうした現状を解決するためには、従来のインデックスを使った知の分類では不十分であり、知の連関あるいは関係性を保存・検索することができるような機械を開発する必要性を主張する。知あるいはテキスト自体ではなく関係性を重視する考え方は、実際には、百科全書派の理念を継承したものだといえる。テキスト自体に力点を置くのではなく、それらの関係性を重視するという考え方は、ジェラルド・ジュネットが『パランプセスト』(1982)の冒頭において提示している「超テキスト性」の考え方とも符合する。そこにおいてジュネットが主張するのは、本来的にはメタ・テキストやパラ・テキストといったような個別のテキストの性質ではなく、テキスト間を結ぶ関係性なのである。

このようにテキスト間の関係性を「布置」としてとらえるのであれば、ミシェル・フーコーが『知の考古学』(1969)で提示した「言説」概念もまた「言説の原子」として考えられる「言表」を組み合わせることで、対象・様態・概念・戦術という4つの審級それぞれにおいて発動するフォーメーション・ルールによって統一性が保証された知の「布置」として考えられている。フーコーが提示するこの布置は、中心をもたずお互いの関係性の記述によって絶えず分散していく全体として提示される。

このように布置を個々のテキストによって構成されるものとしてとらえるのではなく、テキスト間の関係性によって構築される全体としてとらえるとき、そこに関係性の指示対象をとらえる観察者あるいは解釈者の存在を措定することが可能になるのであり、解釈学とテキスト布置とを結ぶ次元が現れてくるのである。

■ 「テキスト布置解釈学概論」の要約

この授業は博士後期課程科目の「テキスト布置解釈学」講義（原論・各論）の導入として博士前期課程の受講生を対象とし、三人の担当教員によるワークショップ形式で開講した。毎回、テキストの布置構造や解釈学に関して一つのテーマを設定し、担当教員がそれぞれの専門の観点から論点整理を行い、その後受講生とともに全体で質疑応答を行った。

・19世紀文学テキスト（鎌田隆行）

主としてバルザックの作品の事例を中心としながら、文学テキストがそれ自体として単独で存在するものではなく、周囲の布置テクト群との関係性の中で立ち現れ、また読み継がれて再解釈の対象となっていくことを確認した。時に題名・序文の差し替えを伴いつつたえず書き直され、集積と再配置を繰り返していったバルザックのテキスト群（『人間喜劇』はその実現の一例に過ぎない）は、その自己規定の多様性（「喜劇」「情景」「研究」の名が混在する一方で、作者はしばしば序文等で「タブロー」とも呼ぶ）とともに、輪郭の曖昧さを特徴とする。どこからどこまでを切り取り、他のいかなるテキストと関連づけるかという布置の確定次第で読み方が全く変わってしまうこの作品は、テキスト布置のダイナミズムを例証する文学空間である。

・18世紀文学・思想テキスト（フォヴェルグ・クレール）

テキストの物質性は、大抵の場合、校訂版において隠蔽されてしまう。例えば、もともと本文の余白(欄外 *marginalia*)に書かれたテキストが書き込み(*insertion*)のテキストとして復元されたり、主題から脱線したテキスト(*digression*)として提示されたりする。ところが、このような校訂上の決定は、どんな学問分野においてもテキストの理解に影響を与えるのである。あらゆるテキストは他のテキストを参照させるので、書く行為は意味と同様に解釈の対象となる。つまり、テキストの意味はそのテキストが属する布置に依存する。この原理は18世紀の文学や『百科全書』に適応可能である。そして、哲学的解釈学はテキスト性に関わる現象に対する新しい観点をもたらすのである。

・歴史テキスト（加納修）

6世紀初頭に成立した『サリカ法典』を素材として、テキスト布置および解釈学の観点からテキストを研究することの意義と限界とを論じた。間テキスト性、メタテキスト、そして解釈学の観点は法典の機能・実効性や、とりわけ伝来過程、そして伝来を支える読解の歴史の解明に有効である。これに対して、前テキストやパラテキストという分類は、やや作者中心的概念であるがゆえに、ジュネットらによる定義に依拠して考察することには注意が必要である。しかし重要なのは、テキスト布置の問題系を意識することであり、それにより6世紀初頭という時期におけるテキストとしての『サリカ法典』の新たな理解への道が開かれるだけでなく、またわれわれのプログラムの図式を修正する契機が得られるかもしれない。

■ gCOE研究会の要約

第二回 gCOE 研究会

日時：7月7日（水）13時30分～16時

場所：文学研究科大会議室

発表者：鎌田隆行（事業推進担当者・フランス文学）

題目：「ジェラルール・ジュネットとテキスト布置の思想——パラテキストを中心に」

本発表ではまず、ロラン・バルトの有名なマニフェスト「作品からテキストへ」と、バルトが提起した問題を批判的に継承したジェラルール・ジュネットの「テキストから作品へ」の読解をもとに、「作者の意図」に依拠した従来型の解釈を批判して読者による内在批評的な読みの多様性へと文学を解放しようとしたバルトの主張と、バルトが大胆かつ不用意に切り捨てた作者、歴史的コンテキスト、書物の物質性、テキストの具体的差異化等の問題の検討がジュネットによる「超＝テキスト性」（テキスト布置）の分析において重要な役割を担っていることを確認した。

続いて、テキスト布置の諸問題のうち、パラテキストについてその定義と分類のパラメーターを確認し、バルザックにおける題名・支持体・序文的言説の問題を検討した。ジュネットが指摘するように、パラテキストはその多様な現われにもかかわらず、1) 作品の価値の正当化、2) 読解の方向付け、の二つを主な機能とする。しかし、バルザックのように複数の作品を並行して執筆・修正する場合、ある作品のパラテキスト、とりわけ序文的言説は進行中のいくつかの作品計画の方向性を変容させる生成的機能を持ちうるものであり、パラテキストの先行研究において未報告であるこの問題の重要性を指摘した。

最後に、テキスト布置の論考を進める上での今後の課題として、翻訳テキストにどのような位置づけを与えるべきか、またそれと関連して翻訳者・編集者など、作者・テキスト・読者を結ぶコミュニケーションに介在する存在の役割を理論的にどのように捉えるべきかという問題を提起した。

質疑応答ではこれらの問題をめぐってそれぞれの専門の立場から知見を交換し、とりわけジュネットが言語変換の次元でのイペルテキストとしている翻訳テキストに対して言語学的観点からの検討が有効であるという展望が確認できた。

■ 第29回オープンレクチャーの要約

日時：2010年7月14日（水）18:00～19:00 名古屋国際センタービル 15階
グローバルCOE オフィス

講演者：フォヴェルグ・クレール（名古屋大学大学院文学研究科・フランス文学）

題目：「『百科全書』に解釈学はあるか」

『真理と方法』において提示されるガダマーの解釈学はおそらく百科全書的ではないだろう。では反対に、ディドロとダランベールによって編集された『百科全書』のうちに解釈学はあるのだろうか。あるいはさらに、『百科全書』と現代の哲学解釈学の間には接点はあるのだろうか。というのも、一般に受け入れられている考えに反して、啓蒙思想は解釈的行為を無視していないのである。

『百科全書』を構成する科目は多様であるため『百科全書』は論証的になりきれないが、その分いっそう解釈的行為は重要になる。つまり、『百科全書』は説明的である点にその特徴がある。『百科全書』とガダマーの解釈学は、知識の現実化(*actualisation*)を問題にすることで共通している。『百科全書』は、知識の現実化を容易にするように構想されており、それによってまた知識の関連は読者にとって可能なかぎり知覚できるようになっている。『百科全書』は、いつか現実化されるよう運命づけられていて、その時代の先を行き、知識の進歩を先取りし、すべての知の同時性を目指しているのであろう。というのも、もっぱら我々の知識の進歩にのみ依存する真理は、すべて一時的である。例えば、哲学体系に属する原理はそう言える。しかしそれにもかかわらず、哲学の歴史は、真理がすべての哲学体系の目的であることを明らかにするのである。

従って、『百科全書』は、諸々の知識の輪を構成する多数の観点を真理の源泉として理解する。『百科全書』にとって理解するとは、多様な観点の収斂する点(*convergence*)を知覚することなのである。もしも『百科全書』の中に解釈学があるとすれば、それは『百科全書』がテキストであると同時に、諸々の人間的知識の連鎖の原理でもあるからである。テキストの次元においても、また観念の次元においても、『百科全書』は、そのうちに書き込まれているのが発見される解釈学を予想しているのである。

■ グローバルCOE研究教育員ブリーフィング要約

第24回ブリーフィング（2010年6月30日）

小林智「明治20年代の判決文に見る「第三者」への対処」

いわゆる旧登記法（明治20年施行）第6条は、登記に関する対抗要件主義を規定していた。当時、その文言上、登記なしには物権変動を対抗しえない第三者

の範囲について、その者が契約当事者間の物権変動につき既知か否かを問わずその範囲内に含まれるとする見解と、既知である者をそこから排除する見解とが対立していた。そこで、当時刊行された書物から、それぞれ対立する立場に与したことが知られる 2 人の判事について、彼らが各々、合議体の一員として関わった事案をいくつか参照すると、実際には、第三者の主観的態様がただちに問われることは少なく、契約自体の成否といった客観的要素の吟味に基づき、結論が導き出されていることがわかる。

したがって、第三者の主観的態様をめぐる学説上の対立が司法的判断に直接的に反映する場面は限られているように思われる。ここには、第三者に関する学理の習得と司法的判断との相互関係をあらためて問う余地がある。

■ gCOEスタッフ海外出張報告

小川正廣「現代中国における古典ギリシア語・ラテン語テキストの研究と教育」

2010年7月5～9日の旅程で、中国吉林省長春市の東北師範大学の世界古典文明史研究所(Institute for the History of Ancient Civilizations, 略号 IHAC)を訪問した。長春は旧満州国の首都新京にあたり、現在は中国共産党吉林省委員会のある旧関東軍司令部など戦中の日本人統治の跡をとどめる歴史的建築物も多い。東北師範大学はその都心近くにメイン・キャンパスを擁し、海外の大学との交流も盛んな教育系の国家重点大学である。

この大学に中華人民共和国で唯一の西洋古典学の研究教育拠点があると知ったのは半年ほど前のことだった。もちろんそれ以前から、中国でもギリシア・ラテン文学の翻訳が出版されてきたことは聞いていた。しかし東北師範大学の IHAC は、西洋古典学の MA、PhD をもつ人材を多数輩出させ、毎年欧文誌 *Journal of Ancient Civilizations* も刊行する本格的な研究教育機関であり、他の中国の大学には類例がない。私の訪問を快諾してくれた呉宇虹所長は、アッシリアの楔形文字の専門家であり、ほかにエジプト学のスタッフと合わせて、研究所全体はメソポタミア史、エジプト史、ギリシア・ローマ古典の 3 部門で構成されている。狭小な専門分化が進み、世界史や古代文明史といった総合的視野の学問が等閑視されている現今の国際的学術動向をかえりみて、このような西方文明の起源に対する基礎的・統合的理解をめざす組織構想は、「テキスト布置の解釈学的研究と教育」という文明史論的問題意識の必要な課題をかかげた本 GCOE プログラムにとっても、学ぶべきところは大きいと思われる。

さて師範大構内の IHAC のある歴史文化学院の前には、1984年に当研究所を創設した林志純教授の銅像が建っている。創立から数えて、まだ 26 年目である。

しかし欧文機関誌はすでに 24 号に達し、修了した学部生・院生も 150 数名。そのうちの多くが教師となって広大な中国全土に分散し、各地の中・高等教育の現場で活躍しているという。ギリシア・ローマの古典学については、現在、張強教授、張楠助教、J. P. Sanchez 外国人教師の 3 教員の指導のもとに学部・大学院に 20 名弱の学生が在籍している。

滞在中私は数名のスタッフと懇談し図書室の蔵書を調査するなどして、IHAC と中国の西洋古典研究に関する情報を集めたが、“War and Peace in Ancient Greek and Roman Epic Literature: Homer and Virgil” という題で 1 時間半ほどの講演をする機会もえた。それには古典学とオリエント学の教員・学生 30 人ほどが出席し、あとの討論もきわめて活発で、とりわけ学生たちの学習の熱意と英語の発信意欲には手応えを感じた。

ところで私は自分の講演の中国語タイトルがいささか気になった。そこにはホメロスが荷馬で、ウェルギリウスが維吉爾と書かれており(いずれも簡体字)、じつはそれらの発音は he-ma ホーマー、wei-ji-er ヴァージルと英語式の読みなのである。あとで張教授に事情を聞くと、中国では主な古典作品は最初英訳のテキストから翻訳され、それ以後原作者名の英語式表記が一般に定着してしまったからだという。ただし現在中国で刊行中の原典対訳叢書では、作者名は従来の英語式でも(例えばリウィウスは李維 li-wei リヴィ)、中身の中国語訳はすべてギリシア・ラテンのオリジナル・テキストからの直接の翻訳だと張教授は強調した。

私は、中国人は自説を容易には変えない民族だという貝塚茂樹氏の言葉を思い出した。それは古典作家名の表記についても言える。しかし、同様にして、IHAC を震源とする中国での西洋古典学普及の波もまた、もはや誰も止められない勢いで今後広がり続けるであろう。

次回のメール版 NewsLetter の発行は 2010 年 8 月中旬を予定しています。

.....

GCOE 「テキスト布置の解釈学的研究と教育」

Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration

<http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/>

NewsLetter No.34

発行：GCOE 編集部

編集担当：鎌田隆行

Copyright(C) 2010 NAGOYA UNIVERSITY, GRADUATE SCHOOL OF LETTERS

.....